

プロローグ

九州のとある地方に存在する空美町は人口七千人ばかりの小さな町だ。これといった名物もなく、あるものといえば畑を耕すおぼちゃん笑顔と樹齢四百年を越える大きな桜の木くらい。しかし一見どこにでもある長閑な田舎町には、とんでもない秘密が隠されている。

それは空にあるシナプスという天上世界との関わり。たとえば目下、桜井智樹の部屋を掃除している羽の生えた少女イカロス、シナプスで生み出された戦略エンジェロイドという兵器である。かつてシナプスの命令で人間が住む地上世界を破壊したこともある彼女だが、現在は智樹や他のエンジェロイドと共に静かに暮らしている。

そのイカロスはただいま智樹の部屋を掃除中である。学校の試験期間が近づいているため空美中学校の生徒たちで集まり勉強会を開くことになったのだ。会場には大人数が集まっても支障ない場所として両親が海外に居る智樹の家が選ばれた。

参加者は部屋の掃除班と買い出し班に分かれて準備することになった。くじ引きの結果、掃除班になったのがイカロスと風音日和。

日和は腰まで届く長い黒髪を後ろで一本に結った少女。溢れ出すスケベ心で女子から蛇蝎の如く嫌われている智樹を、いつも楽しそうに生きていて羨ましいと好意

的に見る少し変わった少女である。

純情でスケベなことに免疫がない日和は、ちょっとしたことでも顔を赤らめてしまう。今も智樹の部屋で彼のお宝コレクションを前に赤面していた。

「桜井くん、こういう女の人が好きなんだ……」

掃除も終盤ほぼ終わりかけたころ日和は、智樹が押し入れの中に隠していたエロ本の数々を偶然にも見つけてしまった。初めは見るつもりなかったが、想い人が普段どんな女性でエッチなことを考えているのか気になってしまい好奇心を抑えられなかった。

ちゃぶ台に本を広げ、しげしげ眺めているといつの間にかイカロスもやって来て、二人で^{マスター}智樹の好きな女の子のタイプを勉強する会が始まってしまった。

男の人にエッチな妄想をしてもらうためだろう。本に載っている女の人たちは裸や着ていても下着程度の服装。大きな胸やお尻を強調したポーズで挑発的な目線をカメラに向けている。

つつい日和は自分の胸を見下ろし、次いで隣のイカロスと比べてしまう。日和の名誉のために言っておくと彼女とて胸囲八十二センチと中学生にしては『ある』ほうだ。だが本に載ってる女性たちは男好きする肉体美を職業にしてるプロであり、イカロスもまた美しく造られた存在である。

「大丈夫ですか日和さん」

自分が原因とは思わないイカロスが日和に尋ねる。気落ちして見える日和を純粹に心配してくれたのだろう。

「ううん、何でもないの」

日和が答えるとイカロスは僅かに首を傾げた。

二人が読み進めると途中でゲームの広告ページが挟まれていた。雑誌の経営では大事なスポンサー様の宣伝である。いわゆるエロゲーの新作宣伝のようだ。ありがたいなファンタジーエロゲ。剣と魔法の世界で美女たちとエッチなことができると書いてある。

(こういうゲーム、桜井くんもやるのかな)

広告の内容に興味を持った日和の手が止まる。ゲームのプレイ画面を写した写真では、ポロポロの服を着せられた少女が異形の怪物に前後から挟まれ、穴という穴を犯されていた。

荒々しいセックス描写から日和が目を離せなくなっていると視界の端で何かが光った。光源はイカロスが持っているカードのようだった。

「なに？」

イカロスのカードが不思議な現象を引き起こすことは日和も知っていた。彼女が智樹のために何かを案じて発動させたのではとまず考えた。しかし見るとイカロスも慌てているようだ。感情表現に乏しい彼女だが、今は顔に「こんなはずでは」と書いてある。

「日和さん」

イカロスが手を伸ばしてくる。何かが起きてても自分のそばにいれば安全と彼女なりの判断があったのだろう。しかし、イカロスの手が日和に触れるよりも先にカードは閃光弾のような光を放ち、部屋を真っ白く染め上げ

た。

光が収まったとき二人の姿はどこにもなかった。

「ただいまイカロス、風音さん」

「アルファ、帰ったわよ」

智樹とニンフが家の中に呼びかけながら廊下を歩いてくる。答える声はない。

「出かけてるのかな」

あまり深く考えず智樹は言った。他の面々もイカロスと日和は少し外に出ているだけですぐに帰ってくると楽観視していた。

しかし、そのころイカロスと日和は……。

イカロスルート

男爵の爵位を持つ歴とした貴族でも田舎の小領主程度では大した暮らしぶりでないらしい。袋から出した金貨を目を皿のようにして数えるコリアー男爵の姿を見るにつけジャレッドは心の中で侮蔑が止められない。

自分の才覚でのし上がったわけではなく、ただ先祖伝来の領地を与えられそこから吸い上げた財だけで暮らす豚のような男。貴い血とやらが流れてなければこの男自身には何の価値もない人間。それなら俺のほうがマシじゃないかとジャレッドは思う。

野盗の頭目というのは世間的に褒められた職業じゃないが、生まれも学もなく腕っぷししか自慢できる者のない人間が、それを活かしてのし上がることの何がいけないのか。これも立身出世というやつだろう。

ジャレッドは少年時代に野盗の下働きから始め身体の成長とともに頭角を表し、やがて独立して己の子分を持った。現在では五十人近い大所帯に成長し近隣一帯を荒らし回る大規模な野盗に成長した。

「今月はこんなものか。最近ちいっと収入が減ってるんじゃないか」

金貨を数え終えたコリアー男爵は全て袋にしまうとテーブルの脇に置いた。傍らのグラスに手を伸ばし葡萄酒に口をつける。差し向かいで座るジャレッドには勧め

てもこない。この葡萄酒だって俺が払ってる金で買ったものだろうに。そうでなければ一瓶で平民の月収半年分に相当するワインなど田舎男爵が水のように飲めるはずない。

「近ごろ頻繁に叩きすぎたな。ああいう連中は生かさず殺さず細く長く搾り取らにゃならんのに。今じゃ骨と皮ばかりで鼻血も出ない有様だ」

ジャレッドたちは目をつけた村落に数ヶ月おきで襲撃を繰り返してきた。そのくらい間を空けるとボロボロにした村も復興の兆しが見え、また蓄えを始めるのである。それを再び奪う。農作業と一緒に。土を酷使するばかりでは最初こそ実入りがよくても、やがて作物が育たなくなり収入は途絶えてしまう。安定した実入りには休ませる期間も必要になる。それを男爵は月一回のペースで回るようにしろと言う。無茶苦茶だ。何も分かってない。

「カラカラに乾いた雑巾だって絞れば水は出てくるもの。骨と皮ばかりに見えても血は残ってるかもしれないぞ。何せ平民という連中は学も教養もない癖に悪知恵ばかりは働くからな。特に金目の物を隠すことに関しては」

自分では雑巾など絞ったことない男がよく言う、とジャレッドは鼻で笑いそうになるのを堪えた。ジャレッドは勉学というものとは無縁な育ちをした。そんなものが必要と感じたこともなかった。力さえあれば金は稼げるし、金が稼げれば無学なゴロツキでもこうして貴族と

対等に話せるからだ。そんなジャレッドから見てもコリアー男爵の学や教養が、彼が自慢げに話す平民とは格が違う貴族の水準とやりに達してないことだけは分かる。

野盗団にサイラスという男がいる。今から五年前、まだ少年の面影が残っていたころ山で行き倒れていたのをジャレッドが拾い、読み書きだけでなく帳簿も理解できると聞いて団に引き入れた。武器の仕入れや略奪品の換金でブラックマーケットの商人たちから金額を誤魔化されているような気配が以前からあったので、会計を任せることにしたのだ。

サイラスの素性は本人が語らないので謎なままだ。上等な教育を受けた形跡やコリアー男爵よりも遥かに洗練された所作を見るに大店の息子か、ひょっとしたら貴族の子弟が跡目争いのゴタゴタで家から追い出されたのかもしれない。

コリアー男爵との取り引きを提案したのもサイラスだ。団の略奪行為を黙認する代わりに一部をキックバックする。思慮分別のない男爵は簡単に応じた。ジャレッドたちは男爵領内でなら怖いものなしになった。

今夜もジャレッド自ら男爵に換金済みの利益からキックバックを納めに来たのだ。

「まあいいさ。少し長めに間隔を空けてやればすぐに回復するだろうよ」

コリアー男爵は再び葡萄酒に口をつけると立ち上がった。テーブルに両手をつき、身を乗り出すようにしてジャレッドの顔を覗き込む。酒臭い息が顔にかかり不快

だった。思わず顔を背けたくなるのを堪える。

「それでだな、実はお前にひとつ頼みたいことがあってなあ」

「……何だよ」

嫌な予感がしたが聞かないわけにもいくまい。ジャレッドはしぶしぶ答えた。

「ある村を潰して欲しいんだ。その村の連中がどうも侯爵に告げ口しようとしてるらしくてな。そうなればお前たちも何かとまずいことになるだろ」

侯爵とは男爵の親分に位置する相手だ。男爵領も含めた広域を治めている貴族で、周辺の小領主たちから上納金を取る代わりに庇護を与える。日照りや水害などで作物が育たなかったときに備蓄を回してやったり、単独では解決できない問題が発生したとき侯爵の私兵を援軍に差し向けたりが庇護には含まれる。男爵と野盗が結託して領民に略奪行為を働いてるなどと知れたら乗り込んで来るかもしれない。

「仕方ねえな。確かに侯爵と事を構えるのは俺たちにもうまくねえ。村の連中は全員殺せばいいのか」

「ああ……いや、若い女だけは殺さずに連れてきてくれ」

にたりと男爵は醜い顔に好色な笑みを浮かべた。

やはり豚のような男だ、とジャレッドは思った。だがこの豚のおかげで危険なく野盗団としてやっていけるのも事実だ。いつまでも下に就いてるつもりはないが、こんな男でも今はまだ利用価値がある。

「じゃあ明日にでも行ってくるぜ」

「頼むぞ。女は若い生娘が好みだが、あんな田舎村に生娘が残ってるか……まあ、熟れた人妻に平民の貧相な肉棒とは違う、本物のちんぽを味わわせてやるのも一興だがな」

ガハハ！ と男爵は野盗も真っ青の下品な笑い声を上げた。ジャレッドは顔に掛かった唾の飛沫を拭う。ブタ野郎の頭をかち割ってやりたい衝動と戦うのに苦労した。

男爵の館を後にしたジャレッドは馬上の人になっていた。人通りがない夜の山道をアジトに向かって走る。夜空に浮かぶ月を見ながら、明日のことを考えた。男爵の指示に従って村人を殺して回ることになる。今回はジャレッドたちにも都合がいいことなので従うが、今後もうこうした頼みごとが増えると面倒くさいことになりそうだ。良いように影の私兵として扱き使われ、いざというときは尻尾切りなどされてはたまらない。

「権力との付き合い方ってのを考えにゃならんな」

前にサイラスが口にしていた言葉を真似てジャレッドは呟く。あと少しだ、あと少しだけ力があれば男爵と決別してもやっていける。

「まあ難しいことはサイラス大先生にでも任せるか。ゴ

チャゴチャ頭を使うのは俺の性分じゃねえ」

人には向き不向きがある、俺が空っぽの頭を回してもろくなことにならないだろと考えることを放棄したときである、ジャレッドの目が空に二筋の光を見つけた。

「なんだあ？」

流れ星かと思ったが違う。光の中心に人型の影が見えた。

(もしかして魔物か?)

何が現れても不思議ではない。警戒しながら接近する光を観察するジャレッドだったが、そのうちひとつがこちらに向かって急激に進路を変えた。とっさに手綱を引き馬の足を止めさせた。

直後、光が地面に激突した。轟音とともに足下が激しく揺れる。馬は驚き前足を上げて暴れだす。ジャレッドは振り落とされないよう馬首に強くしがみついた。

揺れが収まったところで恐る恐る目を開けてみる。すると目の前に少女が横たわっていた。少女は桃色の長い髪で肌が雪のように白い。着ているものはほとんど裸と言って差し支えない格好。肩から胸にかけて大きく開いているため乳房がほぼ丸見えだ。乳首だけ隠せれば恥ずかしくないと言っても言いたげ。腹部に向かって深い切れ込みが入っている。下はスカートだが、ジャレッドはこんなに短く、少し歩いたら尻が見え放題なスカートを知らない。娼館の女だってもう少し脚を隠している。

どこをどう見ても怪しさしかない少女。単なる痴女と切って捨てられない理由は、彼女の背中に生えている大

きな翼だ。まず人の身ではありえない。

「魔物か？」

疑ったのはハーピーが何らかの理由で落ちてきたというもの。妥当な推論に思えたがハーピーは光らないし、少女の手足は人間と遜色ない。ハーピーならもっと鳥に近い格好をしているはずだ。

「だがよお。人間だって背が高いの低いの、頭がフサフサなのハゲ散らかしてるのといるんだ。ハーピーの中にだって個人差くらいあるかもしれないぞ」

誰にともなく言いながらジャレッドは馬を降りた。気を失ってるらしい女に近づく。

「おい、起きろ。こんなところで寝てると風邪ひくぞ」

軽く肩を揺すってみる。触れた肉体は人間の女と遜色ない柔らかさだった。

ぱちりと少女の目が開く。現れた瞳は宝石のエメラルドを思わせる緑色。辺りの状況を確認するように探っていた目がジャレッドに照準を合わせた。

「インプリンティング開始」

聞き慣れない言葉を少女が呟く。すると彼女の首輪についていた鎖が伸びてきてジャレッドの手に絡みついた。

「何をしやがる！」

魔道具の一種かと身構えた彼の前で少女が三指をつく。それは服従を表すポーズ。

「初めまして。私は愛玩用エンジェロイド、タイプa。イカロスです。あなたが楽しめることをなんなりと……

マイ・マスター
私の鳥籠」

聞いたことない言葉ばかりの中でジャレッドにもかろうじて理解できた単語がある。少女は自らを愛玩用と名乗った。つまり自分の肉体は主人の好きにされて構わないということである。そして、どういう経緯か全く理解できないが、イカロスと名乗る少女はジャレッドをマスターに選んだようだ。

少女の大きな胸は地面に手をついた前傾姿勢でより強調される。たわわに実った真っ白く柔らかい二房の果実から目を離せないのは男の性。さっき触れてみた感触どおりなら全身どこを撫で回しても抱き心地抜群だろう。白い肌は吸い付いて跡を残してやったら映えそうだ。「だからってアジトに訳わからん魔物を連れ帰るわけにゃいかんよな」

名残惜しいものを感じながらジャレッドは言った。

「おい魔物」

「イカロスとお呼びくださいマスター」

少女は感情を感じさせない抑制の利いた声を出す。「マスター、楽しめることをなんなりとご命令ください。欲しいものとかでもいいんです。私たちエンジェロイドはマスターを楽しませるためだけに作られたものですから」

「楽しめることねえ」

だったらとイカロスの胸を揉んだ。大柄なジャレッドの手でも包みきれず肉がこぼれる大きさだった。指に力を入れるたびひしゃげた胸肉がぐにゅうっと形を変え

る。男を触覚のみならず視覚でも楽しませる乳房は、なるほど愛玩用と名乗るだけあり数々の女を陵辱してきたジャレッドでも思わず夢中になる揉み心地だ。

「これがマスターの楽しいことですか……？」

何をされてるか分からない様子でイカロスは首を傾げた。愛玩用と名乗っているのに性知識は皆無なのか。それとも彼女に仕込んだ人間が男は初心なほうが喜ぶと教えたのか。

「ああ楽しいね。アジトにゃ連れていけないがここでサクッとヤラせてもらうおうか」

ジャレッドはイカロスが泣き叫ぶ姿を想像していた。いくら自分を愛玩用と名乗る頭のおかしい魔物でも山道で押し倒し、犯すと脅せば怯えて逃げると考えたのだ。

しかし抵抗どころか彼女はむしろ自分から服を脱ぎ始める。

「分かりました。どうぞお楽しみください」

相変わらず感情を表さない表情と声で言いながら淡々と手を進める。上を脱ぐと形のいい乳房が現れた。先端にあるピンク色の突起が触って欲しそうに誘っている。

「マジか。本当にヤラれてもいいって言うのか」

「それがマスターのお望みでしたら」

そこに自分の意思など必要ないといった様子でイカロスはスカートにも手をかけた。

そうなるジャレッドも我慢できなくなる。もともと欲望に忠実な生き方こそ野盗の本望なのだ。あくせく働いてるだけでは縁がない美味しい飯を食い、高い酒を飲

み、抱きたい女を抱くために世の道理を外れた人間たち。ああだこうだとしち面倒臭いこと考えて据え膳を逃すなど悪党のすることではない。

ジャレッドはズボンを脱いで下半身を露出させる。既に勃起していたペニスは赤黒く脈打っている。

自慢の男根を前にしてもイカロスは何も動かさない。ただじっと見ているだけだ。その澄ました顔が気に入らなくてジャレッドは「啞えろ」と命じた。

「はいマスター」

イカロスは新たな主人の前に膝をつき、生臭い肉棒に顔を近づけた。

あと少しで柔らかそうな唇が亀頭に触れる、その時だった。

——ぐるるるうっ！

辺りから獣の呻き声がした。数は一匹や二匹ではない。完全に囲まれていた。

「俺としたことが。この女に気を取られて気づくの遅れたか」

闇の中からこちらを光る目がいくつも睨んでいた。心なしか獣の臭気も立ちこめている。

「どうしますかマスター？」

イカロスが尋ねる。僅かに唇が肉棒の先端に触れ、吐息も感じた。まだ何もしてないというのに先走り汁が溢れ出し、早くしゃぶってくれと言わんばかりにピクンピクン震える。こら鎮まらねえか。せっかちな相棒をジャレッドは窘める。近ごろ忙しくて女とはご無沙汰だっ

た。それで久しぶりのセックスの気配にいきり立っているのだ。

勃起したままでは格好がつかないし戦いにくい。だが収まってくれるのを待つ時間はないらしい。仕方なくジャレッドは顔だけ凜々しい表情を作って言った。

「決まってるだろ。かかってこい犬っころども！」

ジャレッドが宣言すると敵意を感じてか四つ足の獣たちが森の中から出てきた。山中に捨てられたか何かした犬が野生化したあと瘴気に当てられて魔物化したらしい。狂気に釣り上がった目が赤い光を放つ。

いくら魔物と言っても要は犬っころだ。数匹程度ならジャレッドも慌てない。しかし今、彼らを取り囲んでいる群れは二十匹……いや三十匹はいる。

戦いは数の多いほうが有利。それはほとんどの戦況で揺るがない事実。これだけの数に囲まれて全方位を守ることは難しい。落ち着け、とジャレッドはズボンを上げながら己に言い聞かせた。

(この程度でビビってちゃ野盗なんざやってられんぜ)

深呼吸を繰り返して心落ち着かせる。そうしている間にも魔物たちは距離を詰めてくる。ジャレッドが腰の剣を抜き放つと両者は一触即発。緊張が高まり極限に達した。

そして、リーダーと思しき魔物の合図で数匹の手下が動いた。

(来たか！)

まずは飛びかかってきた奴の頭を剣で突き刺してや

る。脳天を真っ二つに割られ足をピクピクさせながら絶命したそいつの死体を掴んで振り回し、他の連中を弾き飛ばす。倒れた仲間を見て怯んだ隙をついて一番手前にいたやつを斬り捨てる。次に襲いかかってくるやつは喉笛を掻き切ってやる。

「どうだ、人間様をなめるなよ」

生温い返り血を浴びながらジャレッドは愉悦の笑みを浮かべた。やはり暴力。暴力こそが己の本質だと感じる。魔物の頭蓋を叩き割るとき手首にズシッとくる感触が心地よい。肉を切り裂く手応えは確かに命を奪ってるのだと感じさせてくれる。ガキの時分から人並み以上にできることはこれしかなかった。腕っ節を除いたら自分には何もない。だから戦うのが好きだし殺すことに躊躇いもない。他人から見ればただの狂人だと言われるだろう。けれど自分らしさを肯定してくれるのならなんでもいい。自分はこういう人間なのだと言え胸を張って言える特技なのだから。

ジャレッドは最初の数匹が終わっても魔物を軽快に捌いていった。剣だけでなく水系統の魔法を使い、飛びかかろうとしてきた犬っころの機先を制して吹き飛ばす。さらに光系統の魔法と組み合わせ、水で作った像に自身の姿を投影させた。仲間を倒され怒り心頭の魔物たちは鏡像に飛びかかる。そしてお互いの喉笛を噛み千切り同士討ちで絶命した。

もし魔物の群れが最初に姿を見せた連中で全員ならジャレッドの勝ちが見える頃合いだった。足下に転がる

死体の増え方は彼の勝利に近いことを物語っているように見えた。だが現実是非情だ。

リーダー格の魔物が遠吠えすると新たな手下たちが現れたのだ。あくまでも最初に姿を見せた魔物は第一陣らしい。総勢では百頭近く潜んでいるのではないか。

「次から次にじゃれついて来やがって。人間に恨みがあるなら自分を捨てた奴のところに行けってんだ」

「マスター」

忌々しげに叫んだジャレッドに背後から声を掛ける人物がいた。

「マスターは彼らの排除を望みますか」

絶体絶命の窮地でもイカロスに慌てた様子はない。抑揚のない喋り方で淡々と言った。こいつには感情というものがないのか。さすがのジャレッドも不気味に感じたが、今は深く考え込んでいる余裕ない。溺れる者は藁をも掴む。彼はイカロスに命じた。

「できるもんなら犬っころどもを全部ぶっ殺せ！　それが俺の楽しいことだ」

「分かりました」

イカロスが頷くと、彼女を中心に熱い風が吹き抜けた。相変わらず表情は硬いままだが、今は全身から戦意のようなものが感じられた。

「マスターへの敵対行為と見なし、あなたたちを排除します」

イカロスが言うと彼女の身体から何かが射出された。ジャレッドが初めて見るそれは、魔物の身体や地面に衝

突すると激しい爆発を起こした。一発で数匹の魔物が爆散する。着弾した地面は溶けて溶岩のようにドロツとしている。直撃すれば間違いなく致命傷になる攻撃だ。火系統の上位魔法使いも裸足で逃げ出す威力。しかも逃げ惑う魔物たちを正確に追尾していく。

「私のそばにいてくださいマスター。ここが一番安全です」

爆風に巻き込まれそうになったジャレッドはイカロスに引き寄せられた。言葉どおり彼女のそばは台風の中心地だった。周りが荒れ狂う暴風雨に痛めつけられている中そこだけは凪いでいる。おかげで人心地つけた。魔物の血で汚れた剣を拭いながら状況を確認する。

イカロスの攻撃は一発だけで終わらない。続けて二発、三発と発射される攻撃によってあっという間に形勢逆転してしまった。敵の数は一気に減ったように見える。激しい爆発と音で犬っころどもは戦意を喪失していた。尻尾を巻いて逃げるというやつだ。統率された動きなどなく散り散りに闇の中を逃げ惑う。

(こいつは使えるな)

もう危険は去ったと見てジャレッドが剣をしまう。

「もういいぞ、イカロス」

「はい、マスター」

イカロスは返事とともに攻撃をやめた。その途端、吹き荒れていた風が止み、爆音も聞こえなくなった。辺りには静寂が戻って来た。

「おまえ、すごいんだな」

ジャレッドの口から素直な感想が漏れた。

「ありがとうございます」

イカロス表情を変えず、淡々とした口調で言った。
「褒められたときくらい少しは嬉しそうな顔をするもんだ。褒め甲斐のない部下だな」

「嬉しい？ 嬉しいとはどんな感情でしょうか」

「お前それ……」

本気で言ってるのかと聞こうとしてジャレッドはやめた。出会ってからの短いやり取りだけでもイカロスが冗談や嘘をつけるタイプでないことは分かった。本当に一般的な感情が理解できないのだ。

（人間と同程度の知能はありそうなのに、一体どんな環境で育てばそうなるんだ）

彼女の正体や生い立ちを訝しんだが正直それはもうどうでもよくなっていた。イカロスほど強力な戦力が自分をマスターと呼び傳くのだ。みすみす見逃す手はない。

ジャレッドは前言を翻し、イカロスをアジトに連れ帰った。

アジトに戻ると子どもたちが外で何があったか説明しろとせっついてきた。ここまでイカロスの攻撃による爆発音は届いていたらしい。

「そういうわけで今日から俺らの仲間になったイカロスだ。よろしくしてやってくれ」

ここまでの出来事を説明してやったが子分どもは半信半疑。それはそうだろう。外見だけならイカロスはエロい身体をした少女でしかない。摩訶不思議な術で魔物の群れを退ける強者には見えない。

「よろしくお願いします」

イカロスが腰を折って挨拶すると子分からどよめきが生じた。たゆんと揺れた胸に彼らの視線は釘付け。じゅるると涎を啜り上げる音まで聞こえてくる。

「お前らなあ」

ジャレッドは呆れつつも気持ちは分かるので叱ったりはしなかった。かくいう彼もイカロスの美しさやセックスアピールに溢れた肢体には目を奪われたのだから。

「口で言っても信じられないだろ。お前の力を見せてやるとしよう。何か食べそうな魔物を適当に捕まえてきてくれ」

「分かりました」

短く答えたイカロスは翼を広げ外へ飛び出していく。大きく広げた羽を二度、三度羽ばたかせるうちに少女の姿は見えなくなる。短いスカートから覗いた美味そうな尻に口笛を吹く間もない展開に子分は呆気にとられていた。

「飛行速度は大したものですね」

イカロスが飛び去った先を眺めていたジャレッドは、いつの間にかそばに近寄ってきたサイラスに声を掛けら

れた。黒髪を丁寧に撫でつけたサイラスは野盗より商会の番頭か何かに見える。エロい格好した女なら大歓迎とイカロスの加入を喜んだ団員の中で、彼だけは少女の素性を訝しんでいた。

「あんな速度で飛ぶ魔物は見たことありません。神話の世界の住人ですよ」

サイラスは腕組みしながら言った。あらゆる魔物の姿、名前、弱点を暗記している彼の脳内図鑑でもイカロスに該当するものはないようだ。

「だからと言って人間とはなおのこと考えづらい。羽が生えた人間なんていませんからね。彼女が魔物だとするのなら人間に味方し、お頭を助けたのか実に興味深いです」

それはジャレッドも気になっていた。自分にはマスターと呼ばれる覚えなどひとつもない。

「魔物は強い者に従う習性があります。通常であれば人間に従うとは考えられません。なのに彼女はお頭に従っている」

「その言い方だと俺が弱いみたいじゃねえか」

ジャレッドは不愉快そうに言った。本気で腹を立てたわけではない。からかってやるだけだ。

「失礼しました。魔物が人間に従順なのは珍しいと言いたかったのです」

サイラスは表情を変えない。本当に申し訳ないと思っているのか怪しいところだが、無意味な挑発や失言をする男ではないので馬鹿にする意味はないのだろう。

「まあいいさ」

ジャレッドは余裕あるところを見せようと鷹揚に頷いてみせた。

「あいつは確かに規格外の強さだが俺に従ってるうちは頼もしい味方だ。あいつを使えば男爵の野郎にヒツヨーケイヒを払う必要もなくなる」

それに、とジャレッドは先刻のコリアー男爵にも劣らない邪悪で下卑た笑いを浮かべる。

「男と女の強さは腕っ節だけで比べるものじゃねえ。女の身体じゃ絶対に勝てない男の強さってもんがあるからな。そっちで俺から離れられないようにしてやる」

ジャレッドの欲望まみれの言葉にもサイラスの表情は変わらない。

「それも彼女をそばに置いておく理由ですか」

ジャレッドは自信満々で頷く。イカロス美しいだけでなく、胸や尻、太もも、腰、身体のありとあらゆる部分が素晴らしい。特に巨乳は歩くたびにぷるん、ぷるんと揺れ動くほどたわわだ。それでいて戦士のように引き締まった身体を持つ。さぞかしアソコの締まりもいいんだろうと期待してしまう。

自慢のイチモツを根本まで捻じ込んで膣内射精する妄想に浸っていると地面が揺れた。

「地震か！」

「敵襲かもしれんぞ」

子分たちが思い思いの武器を手にもアジトの外に飛び出してく。その背中を見ながらジャレッドは最後尾を歩い

た。

「これは驚いた」

外に出ると珍しくサイラスが動揺した声を出す。無理からぬことだった。アジトの前に小山のような魔物が寝ている。ピクリともしない身体は所々が焦げていた。肉の焼き焦げるにおいでまだ倒されてからそう時間が経ってないと分かる。

「マスター」

魔物の影からイカロスが顔を出す。彼女の身体には傷ひとつなく表情も無感動なままだ。これほどの大物を倒したとなれば、どんな人間でも多少の興奮は見せるものだが彼女にその気配はない。

「これはオークキングですよ。一国の騎士団が総出で討伐に当たる駆除対象です。それを単独で討伐するなんて」

信じられない、こんなことってと呟きながらサイラスはオークキングの死体をあらゆる角度から検分していく。

オークは豚のような醜い顔をした魔物の一種だ。大柄な体格から繰り出される強烈な一撃は正規の訓練を受けた騎士でも軽々吹き飛ばす。通常オークは集落単位で暮らしているが、複数の集落を束ねるジェネラルという地位のオークがおり、さらに複数のジェネラルを統括して地域一帯を支配下に置くキングがいる。普通オークキングは人前に姿を現さない。王は玉座を動かないものだからだ。しかし、ひとたび何らかの衝突が発生するとキン

グ討伐は、国の命運を懸けた大事業になる。

イカロスが成し遂げたことは本来なら国から表彰される英雄的行為だ。本人はマスターの命令を履行できた以上には捉えていないようだが。

「それにその鎖、どこまでも自由に伸び縮みするのですね」

サイラスはジャレッドの手とイカロスの首輪を結ぶ鎖に興味津々だ。ここら近辺でオークキングが出たという話は聞いたことないので相当遠くまで遠征してきたはずだが、それでも鎖がジャレッドの邪魔になることはなかった。

「そのうえ鎖自体を隠せるらしいぞ」

アジトまでの道中にジャレッドはイカロスにいくつか質問した。彼女がどこから来たのか、何が目的で自分に近づいたのか。ほとんどの質問は回答が得られなかった。イカロス本人も分かってないらしい。明瞭な答えが返ってきた中には彼とイカロスを結ぶ鎖に関するものがあった。繋がればなしでは不便だと漏らすジャレッドに、イカロスは鎖を外すことはできない、その代わりに伸縮自在で他人から見えないようにすることは可能だと言った。

「なんと。トラップを隠すための魔法と同じ系統でしょうか」

「知らん。試しに鎖を隠してみてくれイカロス」

「はい、マスター」

ジャレッドが命じると鎖は跡形もなく消えた。だが見

えなくなっただけで繋がり自体が途切れたわけではない。

「本当に興味深いですね。……おや？」

イカロスの首輪に顔を近づけ、ジロジロ見ていたサイラスが何かに目を留めた。

「この左胸の紋様どこかで見た記憶がありますね」

そう言って指さしたのは鎖骨から指四本分ほど下った場所。イカロスの白い肌に赤い入れ墨のようなものが入っている。何かで引っ搔いた痕のように薄いのでバタバタしてるうちは気がつかなかったようだ。

「イカロスさんの正体を突き止める手がかりになるかもしれません。少し調べてみてもいいでしょうか」

「好きにしろ。どうせ俺には分らん」

ジャレッドが投げやりに言い放つとサイラスは静かに頷いた。

入れ墨のことなどどうでもいい。今、ジャレッドの頭を占めているのは、早いとこイカロスを抱きたいという肉欲だった。

「服を脱いだらここに寝ろ」

アジト内に戻ったジャレッドが指さしたのは、団員が食卓を囲む大広間のテーブルだった。まだ食べ物が残っ

ていた食器を手で払い除け場所を空ける。

「これでいいでしょうか」

イカロスと言われるがままに全裸で寝そべる。やはり美しい肉体だ。服の上から想像した以上に均整の取れたプロポーション。眩く輝かんばかりに白い肌も目に鮮やか。

前に襲った村で豪農の娘を手籠めにしたことがある。近隣では一番の資産家で贅沢な生活をさせてもらってらしく、そんじょそこいらの貧乏貴族の娘よりも身体の手入れには金と時間をかけていた。久しぶりの上玉に我を忘れたジャレッドは処女だという娘の膣に挿し込み、泣き叫ぶ彼女の身体をたっぷり堪能させてもらった。

そのころにはコリアー男爵との話もついていたので領主軍が駆けつける心配はなかった。ジャレッドは一晩中その村に留まり娘を犯し抜いた。初めは泣き叫んでいた女も明け方には声に甘ったるいものが混じり始めた。そして、最後のほうになると自ら進んで腰を振り出すようになった。

そのときの娘と比べてもイカロスの身体は格段に素晴らしかった。肌に触れれば指を弾き返すほど張りがありながら、指に吸い付くような感触は水気をたっぷりと含んでいる。腰のラインや尻の膨らみ具合などまるで彫刻のようだ。まさに芸術品と呼ぶにふさわしい美しさである。

この女が自分の言うことならなんでも聞くのだと思うと興奮が収まらない。

まずは乳首を口に含み舌で転がすように舐め回す。軽く歯を立てコリッと音がするまで甘噛みしてやった。やや乱暴に左右の乳房を揉んでいく。少女の肌は無骨な男の手のひらに吸い付くようだった。

ジャレッドは夢中になってイカロスの胸を弄んだ。自分たちを取り囲む子ども気なことは気にならなくなっていた。周りで囁し立てるギャラリーのことは無視して出るはずのない母乳を吸い出そうとする。

おかしいと感じたのは唾液でテカテカ光る乳首から顔を上げ、イカロスの表情を窺ったときだ。彼女は自分が何をされてるかも分からない様子でジャレッドの頭を見下ろしていた。表情を形作る筋肉が冷たく、硬く、死んだように動かない。

「何も感じないのか」

そんなはずはないと思いながら聞いた。女を抱くことにかけては自信があった。嫌がる女たちを押し倒し、最後には天国を見せてやってきたのだ。自分にされて何も感じない女がいるとは信じられなかった。

だがイカロスは僅かに首を傾げた。

「マスターは楽しいですか」

「くそっ！」

きっと胸は不感症なんだ。デカイ女にはたまにいる。ジャレッドはイカロスの秘部を弄った。狭い入り口を見つけると指を挿し入れる。まだ濡れ方が足りない膣内で指を曲げ伸ばしし、入り口付近の女が悦ぶ部分を探ってやる。ここだけで啼いて叫びながら絶頂する女もいる敏

感なポイントを責めてるのに、少女の仮面のように固まった無表情は壊れない。

「イカロス、お前は俺の女だ。俺を楽しませるために生きてるんだよな」

「はい、マスター」

「それなら命令だ。ここを濡らせ」

濡れてない穴に挿れるのは女だけでなく男も気持ちよくない。ヌルヌルをたっぷり擦りつけながら腰を動かすからセックスは好いのだ。それができないとなるとただ苦痛なだけだ。

しかし、イカロスの肉穴はジャレッドの愛撫に反応を示さない。半ばヤケクソであるがイカロス自身にどうにかして濡らしてもらわないことには先に進めない。

「分かりました」

無茶な要求にもイカロスは応じる。どうなるのかと注視しながら膣洞を指の腹で撫でてしていると、次第にくちゅくちゅ濡れた音が出始めた。井戸の底から水が染み出し始めるようにイカロスの膣内が濡れる。

「さすがは愛玩用。愛液も自分でコントロールできるってか」

「これでいいでしょうかマスター」

「上等も上等だ」

ようやく濡れて弄りやすくなった肉ピラを一枚、一枚めくるように指先で弄り倒す。イカロスの反応は相変わらず無感動で冷たいままだ。それでも滑りがよくなった指を出し入れしていると濡れ方が酷くなってくる。ク

チュクチュと卑猥な水音が立つように手首のスナップも利用して擦り立てた。

「んっ……あぁ……」

やがて吐息に色っぽい声が混じるようになった。囁くような小さい喘ぎ声。か細い声が逆に男を誘っているように感じた。この声をもっと堪能したい、派手に啼かせてみたいと男の嗜虐心を煽る。

「いい声が出てきたじゃないか。そのまま素直に喘いでいろよ」

自分の行為で相手を感じている姿に征服欲が高まる。手管を駆使して相手を悦ばせる楽しみを知ったとき男は一步階段を上る。自分の快感だけでなく相手の様子も見る余裕が生まれたということだ。

「ああん……あっ……ふぁ……あん」

嬌声を響かせながらもイカロスは表情を変えなかった。快楽に浸っているというより初めての感覚に戸惑っている様子。まだ不安や心細さのほうが大きくて、おまんこの気持ちよさに素直になれない経験不足な少女の姿だ。

(まだ前戯でイケるほどじゃないか)

時間をかけて開発してやる必要がある。同じアジトで寝泊まりするんだ。時間はたっぷりあるさ。

「そろそろ挿れるぞ。だがその前に」

ジャレッドはズボンを下ろした。カチカチに勃起したちんぽが飛び出すと、お頭の巨根に子どもが歓声を上げる。

「頭ヤッチャってください！」

「犯されたがりの変態女なんかヒィヒィ言わせちまえ！」

声援を聞きながらジャレッドはイカロスの口元にイチモツを持って行った。

「しゃぶれ。さっきは途中で犬っころどもに邪魔されたからな」

おずおずとイカロスが口を開くと、少女の瑞々しい唇に中年男が男根を突き入れた。

「じゅぼ……んちゅ……ちゅっ……はぁ……んっ……びちゃ……んんっ……ぷはっ……ちゅうっ……れろ……」

イカロスが小さな口をいっぱいを開いてグロテスクな肉棒を咥えこむ。彼女の頭を抑えてジャレッドが腰を振った。

「まるっきり経験がない処女のフェラチオだな。愛玩用が聞いて呆れるぜ。俺好みのやり方を教えてやるから覚えろよ」

「……はい、マスター……あぶうっ、ぶっ、うう……」

「その一、舌を使って亀頭を包み込むように舐め回せ」

「ふぁあい……あむう……れるっ、れろっ、んう……」

教えたとおりイカロスは口中で舌を亀頭に絡めてくる。亀の頭を磨くようにレロレロと舐め回してきた。最初こそぎこちなかったが徐々に要領を掴んできたようだ。裏筋を舐め上げカリ首を舌先でなぞっていく。鈴口から滲み出た先走り汁の味を覚えたのか先端を口に含むとチュウッと吸い上げる。未経験だが物覚えは悪くな

い。何よりジャレッドの言うことなら少しも疑わず全力で応えようとする従順なところが気に入った。これだけいい女を一から完璧に自分好みに育てられる機会などなかなかない。

「口でしながら空いた手で竿をしごくことも忘れるな」

フェラチオは口奉仕だけに非ずと教えると、すぐさまイカロスの細くしなやかな指が肉筒に纏わり付いてきた。亀頭を咥えたまま根本は手で刺激される。柔らかな唇の感触に加えて絶妙の力加減で扱かれるとたまらないものがある。

「その二、唇でカ리를刺激して射精を促せ。ちんぽの窪みに唇を引っ掛けるようにして刺激するんだ」

指示どおり唇がカリ首の周りを這う。同時に舌が割れ目に沿って這わされ尿道口にねじ込まれた。

（くぅ……そこまでは教えてないのに、こいつ勝手に応用技を……）

巧みな性技に思わず腰が引けてしまうほどの快感が走る。まだイカロスの肉体を堪能したいのでイってしまうわけにはいかない。歯を食いしばり耐えながら次の指示を出す。次は喉奥を使ったディープスロートを教え込むことにする。

「その三、喉の奥まで咥え込んで吸い付きながら頭を前後に動かせ」

「んうう……ぢゅぽっ、ぐぶっ、ちゅぽあ……」

イカロスの頭を両手で掴み股間に押し付ける。すると彼女は自分から頭を前後に動かし始めたではないか。こ

れには驚いた。てっきり嫌がるかと思ったが、彼女は自ら進んでしゃぶりついてきたのだ。喉を突かれているというのに苦しげな素振りも見せず、むしろ恍惚とした表情で一心不乱に舐め続けている。どうやら彼女は喉奥が感じるらしい。とんでもないド変態の全身性感帯女だ。

しかも喉奥まで啜えるディープスロートしたまま、裏筋やカリ首の敏感な部分を舌で的確に責めることも忘れない。さっきまでフェラチオの存在も知らない生娘だったとは信じられない熟練の手管である。

(こりゃ凄い！　こんなのは初めてだぜ)

今まで何人もの女を相手にしたがここまでツボを押さえたテクニシャンはいなかった。まるで娼婦のような熟達ぶりである。いや、それ以上のものだ。愛玩用の愛玩用たるゆえんを見せつけられた思いだ。

(こいつはとんでもない掘り出し物だ)

どんなプレイでも喜んで受け入れてくれる従順な性格。そして丈夫な魔物の身体は男が飽きるまで壊れることなく使い続けられるはずだ。最高の玩具を手に入れた喜びに興奮しながらジャレッドは腰を振る。

あっと言う間に精液が登ってきた。このまま予告なしの不意打ちでドバツと口に出してやったら、さしもの鉄仮面も表情が崩れるのか試してやりたい衝動に駆られた。だが一番濃いやつはナカに注いでこそというジャレッドなりのこだわりが直前でプレーキを掛けさせる。「もうフェラはいいぞ。おまんこにぶち込んでやる」

イカロスの口から男根を抜くと、ジャレッドは彼女を

四つん這いにした。やはり女を征服してやった気分に戻るにはバックからハメ回すに限る。背中を向けるという本人は完全に無防備な体勢で性器の結合を許し、自分では為す術なくただ男の気分で腰を使われ喘ぐ女の後ろ姿ほど色っぽいものはない。

ジャレッドは己の分身の先端を宛がい狙いを定める。そのまま荒々しく強引なインサートでイカロスの初めてを奪った。

(なんだこの穴は！ 名器すぎるだろ！)

突っ込んだイカロスの膣内は複雑な肉の機巧が幾重にも絡みつき、ちんぽを貪欲に求めてきた。人形のような少女の表の顔とは大違い。もうひとつの口には性獣が潜んでいた。一瞬でも気を抜けばすぐに搾り取られてしまう。

早くも腰が重怠くなり始めた。込み上げる射精感を押し殺し、女の背中に覆い被さると耳元で囁いた。

「どうだ？ 俺のちんぽは？」

「……とても……大きいです……」

抑揚のない声で答えるイカロスの声は相変わらず無機質だったが、それでも僅かに感情が籠もっていたように感じたのは気のせいだろうか。

挿入を果たした男は次に征服欲を満たすために動き出す。お前の身体が誰のものになったか教え込むためのピストン運動を開始するのだ。

まずはゆっくりと抽送を繰り返す。膣肉の締め具合を確かめながら少しずつ速度を上げていく。やがてスト

ロークが長くなっていくにつれ膣内も馴染んでくる。愛液も分泌されて滑りもよくなってきた。

ズチュッ、ヌチャッ、グチョッ、ジュプウ、パンパンパン……！

激しい水音が立ち始めた。最初は単調なリズムを奏でていたが、次第に変化をつける。手前から奥に目がけて膣内をいくつかのエリアに分けた。手前ばかり、奥ばかりの繰り返しにならないよう挿入の深さや角度を変え、リズムカルな肉打ち音を響かせながら各エリアの反応を見ていく。

「腹のほうをゾリゾリされるのはどうだ。Gスポットをグリグリされるとたまらんだろう」

「あ……♡ あっ……♡」

「子宮口がコンコン叩かれるのはどうよ」

「くふっ……ふっ……♡ ふっ♡ ふっ♡」

「初めての癖にもう膣奥でも感じてるのか。愛玩用の看板は伊達じゃないな」

イカロスが感じていることを確認しながら腰の振り方を変える。

「奥のポルチオを責められるとイキそうになるだろ」

「入口のところを擦られるのも好きなようだな」

イカロスの肉体が反応してしまうたび、一箇所ずつ言葉で確認する。お前はここで感じるんだぞ、自分が気持ちよくなれる場所くらい覚えておけよと念押しした。

「深いところは亀頭に吸い付くような感触があるぞ」

根元まで肉棒を埋め込んだままぐりぐり押し付けるよ

うに腰を回転させた。スカートが翻るたび男心を誘惑してきた尻に腰を押しつけ、円を描くように動かす。子宮頸部のコリコリした感触を亀頭に受けながら、自分の形にフィットするように開発していく。

「ふぁ……んっ……ふうっ……んっ……んくっ……ふぁっ……」

「相変わらず表情は硬いが、まんこはほぐれてきたようだ。気持ちいい声が少しずつ抑えられなくなってるぞ」

「ふぁっ……あんっ……ふぁっ……ふぁっ……」

「そんなに可愛い声を出すと知ったら、男はもっと聞きたくなくて弱い場所ばかり責めてくるぞ。そら派手に啼け、ほら、ほら、おらっ！」

無表情の仮面が剥がれ落ちかけてるイカロスの様子に気をよくしたジャレッドは、さらに大胆な腰使いで膣奥を抉った。凶悪なカリ首の返しで膣内の肉を削ぎ落とそうとするかのような動きの繰り返し。普通の女なら泣き叫んで助けてくれ、気持ちよすぎて死んでしまうと発狂寸前で暴れ出すジャレッド得意の責めパターン。だがイカロスは快感で僅かに眉根を寄せながらも実に抑制の利いた上品な喘ぎ方しかしない。

「ふぁっ……んっ……ふぁっ……んっ……んっ……んっ……んっ……」

「そうやって我慢されるほど突き崩してやりたくなるのが男の性だと教えてやる」

ヌメるイカロスの穴は絶品だった。長年の勘と経験で

ジャレッドは自分が長く保ちそうにないことを悟る。どうせイクなら女も道連れだとペース配分など無視して腰を振りたくった。

「うっ——う、あっ……はア……ぐッ！」

ジャレッドは目覚めたばかりの快感に悶え、小刻みに揺れる白い尻を軽く叩いた。暴力が本職の彼からしてみれば撫でたようなもの。ぺちんと情けない音しか立たない軽い接触だったが、その効果は凄まじかった。

「はぁあっ♡ く、くううううんっ♡♡ ふっ♡
ふっ♡」

ビクンッと身体を跳ねさせ、イカロスが大きく仰け反った。同時に肉褻がうねり、ペニスを締め付ける。その心地良さに思わず吐精しそうになったもののなんとか堪える。

（くう……ちょろっと精子漏れちゃったぜ）

肉壺の凄まじいまでの食いつきの良さだった。まるで別の生き物のように蠢き、奥へ奥へと引きずり込もうとしてくるのだ。

「うっ……おおお……」

あまりの気持ち良さに思わず声が漏れる。

（こいつはすげえ！）

今まで抱いてきたどの女よりも気持ちいいかもしれない。ただ締めりがいいだけではない。まるで意思を持っているかのように挿れるとき抜くとき、手前にいるとき奥にいるときで絶妙に加減しながら常に適切な力で締めつけてくる。無数の舌を持つ軟体生物に包まれているよ

うな錯覚すら覚えるほどだ。

「この淫乱め！ そんなに俺のちんぽが好きか！ だったらたっぷりくれてやる！ 一滴残らず飲み干せ！」

言葉責めしながらガンガン腰を打ちつける。男根に穿たれた秘穴から止めどなく女のとろみ液が溢れてくる。絶頂が近いのか、イカロスの極上まんこは痙攣しながら吸い付いてくる。その気持ちよさを体感しているとジャレッドの忍耐も呆気なく限界を迎えた。

「イクぞっ！ ナカ出しで種付けしてやる！」

宣言すると同時に渾身の力を込めて突き上げた。亀頭が子宮を押し潰した次の瞬間、大量の精液を吐き出す。ジャレッドは腰を密着させて一滴残らずイカロスの膣内に注ぎ込んだ。

熱い奔流を受けてもなお、イカロスの表情に変化はなかった。だが身体は正直に反応する。絶頂を迎えたらしく膣内が激しく収縮して精液を一滴残さず絞り取ろうとしてきた。

「孕め！ 孕め！ 孕め！」

背後からイカロスの身体に手を回したジャレッドは、精液だけでなく呪詛も吐き出す。男が女の身体を支配する最も分かりやすい方法。女の身体のみに搭載された機能を悪用する手段。自分の種で彼女の胎に子供を仕込む。そのために射精が終わってもしばらくは肉槍を抜かず、子宮口にガッチリ蓋したまま離れなかった。

（こいつの身体は最高だぜ。一度このまんこを経験したら他の女は抱けないな）

最高の射精体験で朦朧としながらジャレッドは考えた。

(もうこいつは俺のものだ。なぜ俺のところに来たとか、正体とか関係ない。俺のモノにして一生可愛がってやろう)

たまには子分どもに褒美がてら抱かせてやるのもいいか、親分ってのは気前がいいところも見せないとなと周りで羨ましそうにしてる連中の目を意識しながら、ジャレッドはちんぽを引き抜く。

膣穴から白濁液が垂れてくるよりも早くイカロスの身体を仰向けに引っ繰り返すと、彼女の足首を掴んだ。両脚を大きくVの字に開かせ子分に見せつけながら再挿入。休まず二回戦を開始した。

「ンあ、ああ、あ……っ」

血のように赤い太陽が急速に山際へ落ちていった。このまま完全に隠れてしまうのは時間の問題だろう。サイラスは人気のない山道でアジトに向かって馬を駆る。蹄が一定のリズムで奏でる音色は彼の焦りを全く鎮めてはくれない。

イカロスが野盗団に加入してから一週間。今日は彼女の正体を調べるため領都にある図書館まで出かけていた。まだ印刷技術が未熟なこの国で本は大量生産大量消費できるものではない。個人で蔵書を持てるのは貴族だけ。平民は公設の図書館で必要な調べ物にだけ使う。

コリアー男爵の父であった先代男爵が教育に熱心な人物だったため男爵領の図書館は、地方貴族が私財で設立したにしては充実していた。平民に知識なんぞ授けてもろくな事にならない、変に世の中のことに口出ししてくるだけだと嫌って領内に図書館を置かない貴族も少なくないなかで、領民の教育は領地の繁栄に繋がると考えた先代男爵は先見の明があったと言える。

なればこそ、なぜあの父親に育てられた息子がこうなってしまったのかとサイラスは苦々しく思う。領主の執務と父親業はまた別の能力が必要ということなのだろう。

とにもかくにも図書館で調べた内容である。イカロスについて分かったことは大まかに言って二点。

イカロスの胸に浮かんだ紋様はマレビトと呼ばれる人間の証しだ。マレビトは大陸に残る伝説上の存在で、他の世界より流れてきた者を指す。過去にも何度か存在が確認されている。彼らの身体には特徴的な紋様が浮かび上がるのだとか。過去のマレビトに浮かんだ紋様のスケッチが図書館で見つけた本に載っていた。そのうちひとつがイカロスの胸にあるものそっくりだった。

続いて分かったことは、マレビトにはこの世界にない特殊な能力が備わってるらしい。どのような能力が発現するかは個人差あり紋様によって違うのだとか。残念ながらイカロスそっくりな紋様の能力は本に載っていなかった。だいぶ昔に現れたマレビトらしく詳細は失伝していたのだ。

ただし、イカロスやジャレッドの様子から推察はできる。

恐らくイカロスに備わったマレビトの能力はマスターと認めた相手の能力を強化する類だ。彼女を自分の情婦としてからのジャレッドは、頻繁に最近では調子がいいと繰り返している。感覚的なものだけでなく魔法の適正にも表れていた。ジャレッドが使える魔法は水系統と光系統の二種類。そのうち水をメインに使い、光は目眩ましや鏡像の作成など補助的な役割だった。光系統にある癒やしの魔法に関しては本人曰く「適性がない」ため使えなかった。

それがイカロスを抱くようになってから簡単な切り傷や打撲程度なら瞬時に治療できるようになった。水系統

の攻撃魔法も一週間前と比較して格段に威力が増している。これは彼女が能力を強化したと考えるべきだろう。
(だとすると彼女はとんでもない拾い物だ)

もしこれが事実なら、マレビトの能力は非常に有用だと言わざるを得ない。

サイラスは前方の地面に抉り取られたような穴が複数空いてるのを見つけた。手綱を巧みに操り馬が脚を取られないよう回避していく。

穴はイカロスとジャレッドが出会った日に魔物を追い払ったときの名残だ。執務に熱心な領主ならすぐに予算と人員を割いて埋めるのだろうが、生憎と男爵は自分が使うもの以外への関心がない。

まだ陽が高いうちにここを通ったとき、サイラスは馬を止めて穴を観察した。地面に向かって爆裂魔法でも放ったような跡。土に混じった小石が熱で溶けていた。直撃したら生物の肉体など一たまりもない。それが無数にある。しかも、ジャレッドの目撃証言が正しければイカロスの魔法は逃げる相手を正確に追いかけて、ほぼ回避を許さなかったという。

「驚異的と言うほかありませんね」

穴ぼこゾーンを抜けたサイラスは前に視線を向けたまま呟く。

彼を震撼させるのはイカロスの戦闘能力だけではない。その人間性の希薄さも彼女への評価を難しくしていた。ジャレッドを慕ってる気持ちに嘘はなさそうだ。彼の部下である自分たちのことも仲間と認識してくれて

いるらしい。だが、それ以外の人間へは興味を示さず、お頭が命令すれば魔物を駆除するのと同じ感覚で殺してしまう。加入したばかりのイカロス連れて村を襲ったときがそうだった。逃げる村人を淡々と虫でも潰すように殺していった。

あの無慈悲無感動な暴力が自分たちに向けられたら？と慎重派のサイラスは危惧せずにいられないのだ。

アジトへ戻ったサイラスは早速ジャレッドに報告しようとして彼の私室に足を向けた。ドアを突き抜けて女の嬌声と男の昂ぶった声が聞こえるものだから、ノックする前から何が行われているか察せた。

「ああっ、マスター、マスター！」

「そうだ、もっと俺を呼べ。俺のちんぽでよがり狂え！」

「マスター、マスター、マスター！」

イカロスが狂ったように敬愛するマスターに呼びかける合間、合間に女の尻に男の腰がぶつかるパンパン音が入る。ジャレッドはすっかりイカロスの肉体にハマってしまった。アジトにいる間中ずっと暇さえあれば彼女を抱いている。力尽きて終わるのを待っていたら、いつ報告できるか分からない。サイラスはドアを叩いた。

「誰だ」

「私です」

サイラスが名乗るとジャレッドは部屋に入ってくるよう言った。

「ひぐっ♡ あゝあああああ♡♡♡♡」

ジャレッドは四つん這いにさせたイカロスを後ろか

ら激しく突いていた。膣穴の奥深くまで侵入を許している彼女はもはや嬌声を隠すことすらできない。

「どうだ、気持ち良いか？ どこが一番感じるんだ？
素直に答えてみろ」

あの無表情な美少女を一週間で俺のちんぽ大好き女に墮としてやった。ジャレッドの声にはそんな得意げで勝ち誇った様子が表れている。獣の交尾スタイルを取らせたまま容赦なく腰の律動を繰り返す。イカロス快感のあまり手足から力が抜け崩れ落ちそうになっている。だというのに、腰だけは男に掴まれ無理やり持ち上げられているため倒れ伏すことができない。おかげでより深いところまでペニスが入り込み子宮口を小突く衝撃をダイレクトに味わう羽目になっていた。

「はっ♡ はっ♡ ふウウ……ふうう……♡」

「またイキそうになってるな？ もう三回はイッただろ？ この欲しがりおまんこちゃんめ！ どこを気持ちよくしてイカせてもらいたいんだ？」

言いながらジャレッドはさらに強く腰を押し付けた。亀頭の先端がポルチオに押し当てられる。そこはジャレッドにとってもお気に入りの場所であるらしい。彼はポルチオに亀頭がめりこむくらい執拗に突く。そのたびにイカロスがどんな反応をするか楽しそうに観察していた。

「そ、そこ♡ ……だめっ♡」

「ここかぁ？ ここがいいんだなぁ！」

子宮口付近を亀頭でぐりぐりされるだけでイカロス

はもう限界だった。高く持ち上げられた下半身をガクガク痙攣させ、腕で支えられない頭は額をベッドにめり込ませている。部屋中におまんこ汁の雌臭いが充満していた。ジャレッドはイカロスが既に三回イットとカウントしていたが、それは恐らく分かりやすく大きなイキ方をした回数で、漣のような軽イキも含めれば二桁に達するのではないか。彼女の股ぐらからこぼれ落ちた淫らな蜜はシーツに大陸地図を描いていた。

「いっ♡ いっぐっ♡ いぐいぐいぐいぐうっ♡」

一際甲高い声で絶叫するとイカロスの全身が弛緩した。彼女は再び絶頂に達したのだ。股間からは勢いよく尿が溢れ出た。同時に膣内が強く収縮し、啞えこんだ男を搾り上げる。これにはたまらずジャレッドも爆発寸前の唸り声を上げた。

傍目でも強烈な快感にイカロスの意識が飛びそうになっていることは分かった。ここで気絶させてもらえればどれだけ楽だろう。ジャレッドはそれを許さない。

「おいおい、何勝手に寝ようとしてるんだ？ まだ俺がイッてないだろうが！」

「んあああっ！」

不意にクリトリスを摘ままれイカロスが絶叫した。

「ああああ！ うああああ！ ああああああああ！」

意識が真っ白になるほどイカされた状態でのクリ撫で。快樂の大波にさらわれ溺れかけていたところに、さらなる大波が襲いかかる。幸せに浸ろうとしていたイカロスの頭が一瞬で現実に連れ戻された。

その反応で気をよくしたのか、ジャレッドがニヤリと笑う。指の腹で押し潰すようにしてクリトリスを捏ねくり回す。痛みと紙一重の快感にイカロスは悶え狂う。「ああ！ あああああ！ ああ！ あああ—————！」
「もう出ちまいそうだぜ。このまま出すぞ」

返事を待つことなくジャレッドは腰を振り始めた。両手をイカロスの腋下から前に回し、肩を掴んで彼女の身体を抱き起こす。より密着した体位からの抽送は突くというより押しつける感じ。亀頭で子宮口を押し広げようとしていた。肉を打つ乾いた音と結合部から溢れる愛液の音が重なり合う。

「あひっ、あっ、いい、それ、しゅき、きもちいいい……」

「そうか、これが好きか」

「すき、これ、だいすき、マスター、マスター、マスターあ……！」

ジャレッドのピストンに合わせてイカロスも自ら腰を振る。精液をおねだりするように自分から尻を男の腰に擦りつけていた。

「くっ、俺も、そろそろ、イクぞ」

「マスター、出して、いっぱい、熱いの、ください」

ジャレッドは抽送を止め腰を密着させて射精に備えた。やがて大きく震えると、溜め込んでいた欲望を解放する。熱い白濁液が大量に注ぎ込まれるとイカロスは、その衝撃でさらに絶頂を迎えてしまった。

「————ッ！ ひっ、あゝあ————♡♡♡ ん
ぐうううううっ♡♡♡」

ジャレッドとイカロスのセックスが終わるのを待ってサイラスは図書館で分かったことを報告した。二人が話している間、イカロスはジャレッドの股間に顔を埋め、射精直後の湿った肉棒をお掃除フェラしていた。上目遣いに男を見上げながら尿道に残った精子を吸い出している。口内に広がる苦味やえぐみすら美味と感じるのか恍惚とした表情を浮かべていた。

イカロスがジャレッドのペニスを喉奥まで頬張り、じゅぼじゅぼと下品な音を立ててしゃぶる。時折、舌を絡ませ、裏筋を舐め上げ、鈴口に吸い付く。顔を前後に動かせば頬肉とちんぼの間でじゅぶじゅぶ濡れた音がした。

「じゅろろっ、じゅろっ、じゅるっ、じゅぼっ、んじゅっ」

イカロスがペニスを吐き出すと彼女の口元から銀の糸が垂れた。唾液まみれの赤黒い肉の棒が天を向く。

まだ彼女のご奉仕は終わらない。竿の部分を両手で掴むと自分の乳房に挟み上下に扱き始めた。柔らかな乳圧でペニスが押し潰され、尿道に残っていた射精の残滓が谷間に塗り広げられていく。イカロスはパイズリを続けながらも、先端を口に含み、舌で亀頭をねぶり、カリ首

の段差を舌先でなぞった。

「……んっ、くふっ……ん、んっ、んは、はぁ……
はぁ……」

イカロスは胸での愛撫を終えると、今度は睾丸に舌を這わせ、玉袋の皺を伸ばすように丁寧に舐め回していく。男の精巣から直接子種を絞り出すように激しくこねくり回す。彼女は熱っぽい吐息を漏らした。男のモノを咥えているだけで興奮しているらしい。その証拠に彼女の股間からは大量の淫汁が流れ落ちていた。男の脚の間に跪いたまま尻を振り、ナカ出し精液まみれのおまんこをかき混ぜている。

ぱっくり開いた膣口からボタボタと白濁液を垂らしながらのタマ舐め。そんな痴態を晒すイカロスの姿にサイラスの股間もムズムズしてくる。だが、今は仕事 중이다。邪念を追い払い、報告を続けることにした。

報告が終わると、ジャレッドは顎に手を当てた。何か考え込んでいるようだ。しばらくして口を開く。

「それで最近調子よかった訳か」合点がいったように呟いた。「その強化能力とやらは俺以外にも有効なのか。つまり他の男がイカロスを抱いても強くなれるのかだ」

「分かりません。ですが可能性はあります」

「なら試してみるか」

言うが早いかジャレッドはイカロスを引き離した。

「お前も来い」

サイラスに命令して自分はイカロスの手を引き食堂に向かう。夕飯を食べたり、酒を飲んだりしていた子分

たちは急にジャレッドが現れたものだから話をやめ、親分の言葉を待った。如何にもセックス終わりですといった格好の男が何を言うのか。

「誰かイカロスを抱きたい者はいるか」

「へいっ！」一人が手を上げた。「ぜひやらせてください！」

「よし、こっちに来い」

「ありがとうございます！」

指名された男は喜び勇んで椅子から立ち上がった。

男の名前はベンという。ギョロツとした目で狡猾そうに辺りを見回し、その場で誰が最も強いのか、誰の下につけば利があるか考えている男だ。もともとは警備の手が薄い村落で民家への押し込み強盗を繰り返していたが、運悪く野盗団が村を襲うタイミングとかち合い、その場で一合も斬り結ぶことなく降参して入団した。その判断は正しかったと言えるだろう。彼が剣を持ったところでジャレッドどころかサイラスにも敵わない。痩せこけて長剣を扱えるだけの筋力がなかった。だから弱い者を甚振ることで自尊心を満たすしか能がないのだろう。男が留守にして女子供しかいない家を狙っては強盗を繰り返してきた。

「他にはいないか」

ジャレッドが言うと一斉に手が挙がった。彼らは皆イカロスを犯したくて堪らないのだ。これほどの美少女が朝も昼も晩も男に抱かれる気配をムンムンに感じながらお預けされてきたのだから当然だろう。股の間から精

液を床にこぼしつつ食堂まで歩いてきたイカロスの姿だけで子どもは既におっ勃てていた。

「お前こっちに來い」

ジャレッドは拳手する男たちの中から太っちょな男を指名した。パンチョと呼ばれるその男は太鼓腹を揺らしながら前に出てくる。

次にジャレッドは背後に向かって尋ねた。

「お前はどうか？」

尋ねられたのはもちろんサイラスである。彼の答えは決まっていた。

「お願いします」

ジャレッドは頷き、イカロスを彼女が初めてアジトに來た夜と同じようにテーブルに寝かせた。

「誰からヤルんだ」

「それじゃひとつ、ここは俺からお相手してもらおうかね」

抜け目なく一番手を奪ったのはベンだった。イカロスの脚を開かせるとその間に身体を入れ込む。膝の裏を掴み、ぐっと押し上げると腰が浮き上がり、割れ目から泡立った精液が溢れ落ちた。

「こいつが欲しいか？ 欲しいよな？ ほら、ちゃんとお願いしろ」

なんと答えたならよいのかイカロスはジャレッドに視線で問いかける。

「抱かれてる間はこいつらを俺だと思え。俺にするのと同じように奉仕するんだ」

マスターの言葉にイカロスが頷く。

「ください……私におちんぼ……ください……」

「どこに何を入れてほしいんだ？ はっきり言わなきゃ分からないぞ」

「私のいやらしいおまんこに入れてください……ぐちゃぐちゃになるまで掻き回してたくさん中に出してください」

「分かった。望みどおりしてやるよ」

ベンはずボンを下ろし、勃起しきったペニスを取り出した。既に先走り汁が滲んでいるそれをあてがい一気に突き入れる。

「んひっ、ふあっ、あはっ、あぐっ、んぐうううっ♡♡♡」

パンパンと音を立てて腰を打ち付けられるたび、結合部から愛液が飛び散りテーブルを濡らしていく。

「おおっ！ おほっ！ すげえ締め付けてくるぜ！ おらっ！ もっと締めろ！ 俺のチンポの形を覚えるんだよっ！ この淫乱めっ！」

「んひっ♡ あひっ♡」

言葉のうえで責めているのはベンだが、実際には彼のほうが追い詰められていた。挿れただけで全身から滝のような汗を流し、眉間に皺を寄せ、小鼻を膨らませて快感に耐えていた。せっかく挿入できた極上まんこを堪能するまではイケない、三擦り半でドピュッでは男の沽券に関わると我慢しているのは明白だった。

「くそお！ なんてまんこだよ」

ベンが背筋を震わせながら叫んだ。そこまでかとサイラスも息を呑む。童貞の小僧でもあるまい、それなりに女を抱いてきた大の男が、手もなくイカされようとしている。あの雌穴はそれほどまでに凄まじいのか。

「イクっ、イクっ、イクっ！」

ベンが歯を食い縛りながら絶頂を訴える。腰の動きが速くなったかと思うと小刻みに痙攣し始めた。どうやら射精が始まったらしい。

「あー出る出る出るうー！」

叫びながらベンはカクカク腰を振って膣内射精を果たした。ゆっくりとペニスを抜き取ると白濁液が流れ出てきた。

「ふう……」

射精を終えて一息つくと、次の男が待ちきれないとばかりに名乗りを上げる。

「退け！ 次は俺がやらせてもらうぜ」

サイラスが道を開けるとパンチョは萎えたペニスを往生際悪く挿れたままにしているベンを突き飛ばした。床に転がったベンが立ち上がるよりも早くパンチョのイチモツがイカロスを刺し貫く。太っちょパンチョのちんぽは長さこそ普通だが腹回り同様に肉付きがよく、周長は平均サイズを上回っていた。

パンチョは慣らし運転もなく最初からトップスピードで抽送を始めた。肥満男の動きに合わせてイカロスの身体が前後に揺れる。パンチョが激しく動くたびに彼女の口から喘ぎ声が漏れ、口の端からは涎が垂れた。腰の

律動に合わせて乳房が大きく弾む。パンチョの顎の肉もブルブル揺れていた。全身の贅肉を震わせ、野盗団に入らなければ彼の容貌では一生縁がなかったであろう美少女の肉筒を好き勝手に使うパンチョは、ニヤニヤと脂下がった笑みを浮かべる。己が世界の中心とでも思っているかのような優越感に浸っている顔だ。

やがてパンチョの顔が紅潮し始めた。息が荒くなる。抽送の合間に動きを止め、休み休み腰を動かす。そうしなければ簡単にイッてしまいそうなのだ。

「おい、早くしろよ」

遅延行為も甚だしいパンチョにギャラリーから野次が飛ぶ。

「うるせえ、黙ってろ」

「そんなんじゃ夜が明けちまうだろうが」

「分かってる」

「だったらさっさと動け」

「黙れって言ってんだろ！」

「ああ、そうかい」

「くそっ、こんなはずじゃ」

言い返すなりパンチョは激しく動き始めた。

「んっ、んんっ、ふっ、ふんっ、んっ、んんーっ！」

パンチョの一突きごとにイカロスの口から甘い吐息が漏れる。彼女は突かれるほど感度が増していっているようだった。背中を反らし、下腹部を前に突き出して、自分からパンチョの脂肪に埋まった恥骨へ自分のクリトリスを押しつける。そして膣壁をうねらせ、絡みつか

せ、絞り上げるように締めつけた。その刺激を受けてパンチョはますます昂っていく。

「くっそ、この女、マジで名器だ」

パンチョは自分のイチモツに自信があったのだろう。一週間前に男を知ったばかりの小娘に負けるはずないと考えていたに違いない。それがどうだ、今は彼のほうが搾り取られている。熟練の女よりも巧みに男を責め立ててくるではないか。サイラスには同じ男としてパンチョの気持ちが手に取るように分かった。天使の見た目をした性欲の悪魔に負けて搾り取られる。限界ギリギリまで我慢するが最後は負けて一滴残らず膣内に射精してしまう。それは悔しくて堪らない一方で、どうしようもなく興奮してしまう。

「あひいっ、ああ、いいいっ、ああ、あああん」

それにしても本当にいい声で啼く女だ。目を閉じて声だけ聞いてても射精しそうになるのだからたまらない。サイラスはズボンの中で先走りに混じり、精液も何滴か漏らしてしまっていた。

「ほら、イカロス教えてだろ。感じてるときは恥ずかしがらず下品に喘ぐんだ。どこがどう気持ちいいか言葉にして男を挑発するんだ」

静かに二人のセックスを見物していたジャレッドが横から声を掛けた。この一週間で彼好みの語彙も教育済みらしい。

「はひいっ！ はぁ……んあぁあぁっ……う、あぁっ、こ、ここ……っ、いいっ……ひぎいいっ！」

「ここじゃわかんねーぞ！ そいつらを俺だと思えて言っただろ。いつも俺としてるときそんな上品だったか」

「ヒグウツ！ あっ、あっ……あああ……あぐっ、あ、ああ……も、もっとお……ふああっ……はあああっ！

あ、あっ、あーっ♡ すき、すきですう！ ペニス、すごい、きもちいい……っ！」

「そうだ。もっと言え！」

「あおっ……ほっ……あっ、おっ、あっ！ おちんぼ気持ちいいですっ……もっと私のおまんこほじって……おちんぼでほじほじしてくだしゃいいいいいいいいいいいい」

一度口にしたら籬が外れたのか、イカロスは続けて淫語を話す。

「ひい、ひいいっ……んひいっ……わ、わたしは……あ、ああ……オチンポ……き、気持ちよしゆぎてえっ……もう、らめえ……っ！ もう、らめです！」

穴の具合だけでも年上の男たちを手玉にする美少女が、さらに耳元で淫語サービス。しかも飛びっきりの美声ときたらパンチョの我慢も理性ももたなかった。

「うおおおおおっ！」

雄叫びを上げて、パンチョはイカロスの子宮目掛けて大量の精液を流し込んだ。

「あっ、あっ、あ、あああ、出てる、熱いのいっぱい出てます！ ん、んんんーっ！」

パンチョの射精を受け、イカロスも身体を弓なりに反

らせる。脚をピンと伸ばし、爪先を真っ直ぐに伸ばして緊張させる。同時に絶頂を迎えたいらしい。パンチョの射精量は凄まじく、結合部から溢れ返った白濁液がテーブルに水溜りを作っていた。

まるで豚の交尾だなとサイラスは思った。

「お前たち身体に変化はないか」

ジャレッドが聞くとベンもパンチョも首を捻る。なぜそんなことをと質問の意図から掴めていない様子だった。

「どうやらイカロスを抱いても強化されるのは俺だけのようだな」

「正式にマスターの契約を結んだ人間だけが直接的な恩恵を受けられるようですね」

「肝心なことは分かったし、今日はここまでにするか」

「——えっ？」

サイラスは驚きの中に恨みがましい気持ちが混ざった声を出した。三人指名しておいて自分だけイカロスを抱けないのか。それはあんまりじゃないか。

「不満そうだな。そんなに俺の女を抱きたいのか？」

ジャレッドの問いにサイラスは黙って頷いた。

するとジャレッドはニヤリと笑って言った。

「冗談だよ、冗談。お前いつも真面目だからちょっとからかいたくなってるな」

「……ひどいですよ、まったく」

「早く機嫌直してちんぽ出しな」

サイラスはズボンを下ろし、陰茎を露出させた。そこ

は男たちに抱かれるイカロスの姿で先走りの汁だらけになっていた。むわっとまだ何もしてないうちから青臭い臭いが漂ってくる。それを恥ずかしいと思う余裕もなくサイラスはイカロスに近づいた。

「後ろを向いてくれないか。四つん這いでしたい」

ジャレッドに後背位で貫かれてる姿を見たときから自分もバックでしたいと思っていた。

「はい」

イカロスは素直に従って、言われた通りの体勢になった。三者三様のペニスでかき回された膣口は緩み、膣奥まで精液を注がれた様子が丸見えだ。イカロスが魔物ではなく他の世界から来た人間なののだとしたら、これだけ膣内射精されて妊娠しないはずがない。連日連夜ジャレッドに抱かれた段階で避妊など手遅れだったろうが。

「挿れますよ」

「お願いします」

形ばかりの許可を取ってサイラスはすぐに挿入する。亀頭が肉襞を掻き分けていくと、それだけでイキそうになった。処女喪失から一週間しか経っていないのに、すっかり男を受け入れることに慣れてしまったようだ。柔らかくなった肉壺の感触を楽しむようにゆっくりと腰を前後させ、徐々に抽送の速度を上げていく。肉槍の先端が最奥に達するたび、イカロスの口から甘い吐息が漏れた。彼女の身体が感じれば感じるほど膣壁は収縮し、男根を締め付ける力が強くなる。快楽を求めるだけの獣になって腰を振る。

バックから力強く腰をイカロスの尻に叩きつけた。肉同士がぶつかる乾いた音が響くたびに彼女の口から喘ぎ声上がる。

「あっ♡ ふっ、ぐう、あぁっ、うう、んっ！ はぁっ、あっ」

その声がまた男の劣情を煽る。彼女の膣奥を突き上げるたびに愛液が溢れ出す。そのおかげで抽送運動は非常にスムーズだった。トプトプと吐き出された粘液を亀頭に絡めて滑らかに出し入れする。抽送速度を上げ、より強く膣壁に擦れさせた。カリ首がGスポットを引っ掻くと彼女は背中を仰け反らせた。

「はっ、ひっ、ひんっ♡ あっ、あっ、あっ♡」

「気持ちいい？ それとも痛い？」

「いっ、いいっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああっ♡ おっ、おっ、おっ♡♡♡」

痛みはないようだが快感に支配され満足な返事もできない。

「そうか気持ちいいか。じゃあもっと気持ちよくしてあげよう」

そう言うとサイラスは抽送の動きを速めた。パンパンと肌を打つ音が大きくなる。激しい動きのせいでテーブルが軋み始めた。イカロスがテーブルごと引っ繰り返らないよう数人の男たちが端を押さえた。周りが慌てても二人はお構いなしだ。脇目を振る余裕あるなら腰を振る。サイラスはイカロスの乳房を鷲掴みにして乳首を抓った。

「あんっ、はぁっ、き、気持ちいい、ですっ、おまんこっ、おまんこっ」

「イカロスのナカも気持ちいいですよ」

膣奥まで挿れると子宮口が龟头を咥えこみ射精を促すようにちゅうちゅう吸い付いているのが分かる。子宮口は龟头の先端部分を包み込んで離さない。子宮口だけではない。まるで膣全体が一つの生き物になったかのように蠢き絡みついてくるのだ。特に入口付近は無数のヒダヒダで覆われていて、それが竿や裏筋を擦り上げてくるのだから堪らない。油断したらすぐにでも出てしまいそうだ。

(いくら名器だからといって、年端も行かぬ少女相手に簡単に搾られるわけにいきませんね)

きっとイカロスの膣内を経験した男たちは、みな自分と同じように思ったのだろう。なんとか歯を食いしばって耐えてきたに違いない。彼らに倣ってサイラスも射精欲を抑え込む。

流れを変えなくてはいけない。反撃を狙って今度は浅い部分にあるザラついた箇所を狙って突き入れた。ここもまたいいポイントらしく、突くたびにイカロスは腰を跳ね上げて悦んだ。

「あっ、そこっ♡ や、あぁっ、そこっ、そこっ」

そこっ、そこっとはばかりイカロスは繰り返す。たとえ言葉にできなくとも反応を見ていれば分かった。彼女の特に好い部分を捉えてしまったらしい。

「ここ？」

見つけた彼女の弱点に亀頭を押し当てながら聞く。少女は桃色の髪を激しく振り乱してうなずいた。そして自ら尻を押しつけてねだってくる。

「んっ！ んっ！ いいっ！ もっと、もっと強くっ！」

少女から引き出した初めてのおねだり。それに応えなければ男ではない。イカロスの狭い蜜壺の中を何度も往復して擦りあげる。そのたびに結合部から白濁液が流れ出した。既に何発も中出しされてしまっているので無理もないだろう。サイラスは膣内でカリ首を肉襞に引っ掛ける。ナカのピラピラにこびり付いた精液をかき出すように腰を使った。

「んはああ、いいっ！ いいです、イキます！ あっ！

あっ！ あああ！」

絶頂が近いのか、少女の全身が痙攣し始める。膣内の動きも不規則になり、まるで別の生き物のようだ。それでも構わずピストンを続けると、やがて絶頂を迎えたのか一際大きく身体を反らせて硬直させる。

「あっ、あんっ、あっ、あっ、んん〜っ、ひうっ、あうんっ」

同時に膣内が強く締め精液を吸い取ろうとしてきた。あまりの締め付けの強さに思わず射精してしまいそうになるものぐっと堪える。まだ終わらせるには惜しいと思ったからだ。

「はあ……ん……あ……ふああ……」

絶頂を迎えた余韻に浸っているのか、それとも体力を使い果たしてしまったのか、ぐったりとテーブルに突っ

伏すイカロスに声をかける。

「大丈夫ですか？」

「……はい……大丈夫れすう……」

呂律すら回っていない。完全に蕩けきった表情からは普段の無表情さなど微塵も感じられない。休みなく連続で四人の男から膣内射精されるなど娼婦のほうがマシなくらい淫らだ。

「まだ私はイッてないからもう少し付き合ってもらいますよ」

イカロスの脚をテーブルから下ろして今度は立ちバックで挿れた。

「ふあああっ」

サイラスはイカロスの片脚を持ち上げ、犬が小便するようなスタイルで責め立てた。彼女の体重を支えるのは地面に下ろされた片脚と股ぐらで繋がったちんぼだけ。ぱっくり開いた淫裂に男性器が抜き出しするところを見ようと見物人どもが一方に集まった。

「ああ、深い、奥まで、奥に、当たって、もう、無理、壊れてしまいます」

「壊れませんよ、この程度で」

「そ、そんな、これ以上、されたら、私、わたし、あ、ああ、ああーっ」

イカロスの身体が小刻みに震え、膣壁がきつく締まる。達してしまったようだ。再び膣内がギュッと締まる。今度はサイラスも堪えられなかった。

「くっ、射精しますよ」

「は、はい、出して、中に、たくさん、注いでください」

イカロス は 膣口 を 引き 締めて 精液 の 放出 を 促した。彼女 の 要望 どおり、サイラス は 膣奥 めがけて 精液 を 放った。

「あっ、熱い、精液、いっぱい、来て、イク、また、イきます、んんんんっ！」

膣内 射精 を 受けて イカロス は 再度 オーガズム に 達した。全身 を ビクビク 震わせて いる 彼女 から 陰茎 を 抜くと 栓 を 失った 秘所 から 精液 が 溢れ 出す。それは 太腿 を 伝って 膝下 まで 垂れて いった。

疲労 と 名器 に 搾り 取られた 快感 で サイラス の 膝 から も 力が 抜ける。カクッと 脚 に 力が 入ら なくなっ て 床 に 尻餅 を ついた。その 衝撃 で 股間 に 残って いた 精液 が 少し 噴き 出た。最後 の 一絞り が ピュッと 放物線 を 描いて 地面 に 落ちる。

（ふう、さすがに疲れましたね）

息 を 整えて いる と ジャレッド が 近づいて きて 声 を かけた。

「お疲れさん。いい余興だったぜ」

どうやら 彼 も 満足 した ようだ。彼の 後ろ に いる 男たち も 興奮 に 血走ら せた 目で 頷く。男たち の ほう を 振り 向いて ジャレッド が 言った。

「おーし、こっからは無礼講だ！ イカロス と やりたい 野郎ども は 全員 出て こい。好きな だけ ちんぽ 気持ち よく してもらえ」

一瞬 いい んです か！ と 驚く 空気が 子分 たち の 間に 流

れたものの、ジャレッドが本気だと知ると一斉にズボン
を脱ぎ捨てイカロスに詰め寄った。

「俺たちやお前のせいでムラムラしっぱなしなんだ。
やっと俺たちにもお鉢が回ってきたぜ」

「そうそう、お前のせいなんだから責任取ってくれよ」

「安心しろって、ちゃんと気持ちよくしてやるから」

口々に言いながら男たちは勃起させて先走り汁を垂
らし始めた。彼らの欲望は既にはち切れんばかりに膨ら
んでいた。

「おいおい、お前らどんだけ溜まってんだよ」

「お前こそ、ちんぽバキバキじゃねえか」

ゲラゲラ笑う男衆。彼らは順番など決めず、準備がで
きた者からイカロスの美しい肉体に群がった。床に引き
ずり下ろされた少女は前後から挿入される。前門の虎、
肛門の狼というやつだ。

「あっあっあっ！ あんっ！ は、激しいい！ もっ
と……もっと突いて、くださいいっ！ ああんっ！
あっあっあっ！ もっと、もっと……もっとお！」

二穴を同時に責められて彼女は悦んでいるように見
えた。快楽に乱れるイカロスを見て男たちのボルテージ
も上がる。早くイカせてやろうとか、もっと激しくして
やろうなどと競い合うように腰を振った。

「お手々が留守だよイカロスちゃん。おまんことケツ穴
同時に責められて夢中になるのも分かるけど、お口と手
も使ってちんぽ気持ちよくしようね」

男たちに突き上げられるイカロスの左右に別な男た

ちが近づく。彼らは手に一本ずつ肉棒を握らせた。両手に莖の状態ではイカロスが左右それぞれ手コキする。合間にフェラチオもしなければならず休む暇がない。

さらに横から手を伸ばしてきた他の男に乳首を弄られたり乳房を揉まれたりする。イカロスは乳首を摘まれるたびに感じてしまい手を止めてしまう。

「ほら頑張れよイカロスちゃん。もっと気合い入れてしゃぶってくれないとイケねえよー」

「うっ、むぐっ！　ぐぶっ！　おごっ！　げぼっ！　あぶうっ！　んじゅっ！　んぐんぐうっ！　んふーっ！　んむっ！　んふっ！　んんう～～～っ！　んはぁぁ……
♡　はぁ♡　はぁ♡」

「イカロスまんこ本当にすげー。大人しい顔してナカは下品に絡みついてきやがる。そんなに俺のちんぽ気に入ったか。おれもイカロスのまんこ大好きになったぞ」
「ケツハメもだ。こんなの知ったら他の女なんか抱けなくなっちまう」

「んんーっ！　んぶーーっ！　んじゅるるっ！　ぐふっ！　ぐふうーっ！　んぶっ！　んぼっ！　ずずっ！　んはっ！　ぢゅりゅっ！」

男たちが口々に自分の肉体を称賛する声を聞きながら、イカロスは左右のおちんぼ相手に頭を振った。頬肉を擦りつけて射精を促す。

口の中で爆発寸前のおちんぼたちはすぐに射精を迎えた。口中に粘っこい精液を吐き出される。生臭い臭いが広がり脳髓を刺激する。イカロスはそれを飲み干して

いく。

前の穴に挿入していた男の動きが変わった。フィニッシュするための動きだ。後ろのちんぼも連動してゴールに向けたスパートをかける。阿吽の呼吸で男たちは前後の肉筒をかき回す。子宮口に亀頭が当たると腰が抜けそうなほど気持ちいい。頭が真っ白になって何も考えられなくなる。

「ああ、イク、イクぞお」

「俺もだ、出すぞ！」

前後で男が二人同時に射精した。膣壁と直腸を火傷してしまいそうな熱を感じた。ナカ出し精液に子宮を叩かれ頭の中がスパークして意識が飛ぶほどの快感を覚える。

「ふあああ♡ 奥っ！ 子宮突かれてっ、おまんこ蕩けるう！ あひっ、ひゃあんっ♡ あっあっあっ♡」

絶頂の余韻に浸る間は与えてもらえない。すぐに別な男たちが再び二穴に挿入する。イッたばかりで敏感になっている膣壁を擦られイカロスは悶える。

「おお～、すっげえな。イキっぱなしかよ」

「ちょっと休ませてやれよ。イッてる最中に動かすの可哀想だろ」

「そう言うお前だってケツ穴バコバコ突きまくってる癖に」

男たちは雑談しながらも腰の動きは片時も止めない。
「あっあっあっあっあっあっ！ お尻も、おまんこも、いい、いいです、もっと、奥まで、突いて、くだ

さいいいっ！」

「言われなくてもそうしてやるぜ！」

男は宣言通り、一気に奥まで貫いた。内臓ごと押し上げられるような衝撃でイカロス は口から空気の塊を吐き出した。前から後ろから、両方の穴が擦り上げられ掻き回される。もう手に力が入らないのか、ちんぽを握り続けることもできない。それでも容赦のない抽送運動は続く。

「いぎいいいっ！　ぐひっ、あっ、んひっ、あっ、あっ、
ああああ、ひっ、んひあああああっ！」

あの日からイカロスは野盗団全員の慰み者になった。基本はジャレッドの情婦だが、彼は手柄があった子分に報奨としてイカロスを抱く権利を与えた。望めば金銭での支払いも可能だが男たちは誰も彼もがイカロスを求めた。それほど彼女の性器は具合がよかったのだ。

サイラスが危惧したイカロスの裏切りはなかった。彼女はジャレッドに付き従うことに喜びを見出しているようだ。マスターの命令とあらば戦闘では容赦しない。袂を分かったコリアー男爵が差し向けた騎士団を眉ひとつ動かさず殲滅してみせた。

人の死をなんとも思っていない冷徹さの一方で、マスターに抱かれると感泣に頬を濡らす。普段は相変わらず口数少ないのに、男に抱かれるときだけは激しく身悶え、仕込まれた淫語を口にする。そのギャップもまた男たちを燃え上がらせた。

熟れた日々のなか、最近イカロスは男に抱かれていると優しそうな少年の幻覚がチラつくようになった。彼は柔らかい声でイカロスの名前を呼んでくれる。その顔に、声に、イカロスは覚えがある。何か大事なことを忘れていた。自分の一番重要な記憶。思い出さなければいけないこと。

少年のことを考えるとイカロスは胸の動力炉に変調を感じた。

そんな彼女の思索を邪魔するようにジャレッドが腰を振る。

「おい、何考えてんだ？ 俺以外の男のことか？」

凶星だった。しかし答える余裕はない。彼に与えられる快楽に翻弄されてそれどころではなかった。

「ちが、違うっ、ひうっ、ああっ」

なんとかそれだけ絞り出す。

彼女はそれ以上何も言わなかった。ただ喘ぎ声だけが響く。ジャレッドも深くは追求してこない。

イカロスが身体を抱き起こされ繋がったまま体位を変える。対面座位の体勢を取らされた。自重によってさらに深く貫かれ、たまらず仰け反った。そんな彼女にお構いなく男は下から突き上げるように腰を揺すった。女の弱点を知り尽くした動きだった。

(ああ……あっ、イク……う、イクうう……！)

快楽中枢を直接殴られるような衝撃に襲われて彼女は絶頂を迎えた。背中を反らせガクガク痙攣させる。

そんな最中でも少年の顔がちらつく。彼のことを考えようとすると途端に胸が苦しくなった。この感覚を知っているような気がする。だけど思い出せない。どうしても思い出せない。大切なことだったはずなのに。

「くっ……出るぞ……膣内で受け止める！」

宣言した直後にジャレッドがイカロスのナカに吐精した。孕ませる気満々の粘っこいドロドロ精子にイカロスは思考まで真っ白く塗り潰される。

イカロスの切実な想いは快楽に押し流されていった。